

佛國寺と石窟庵

朝鮮總督府

— 朝鮮寶物古蹟圖錄第一 —

四六四倍、圖版七六、各葉有解説
大正十三年刊、定價十二圓

本圖錄は先に公にされた朝鮮古蹟圖譜の後を受けて
新に同總督府より朝鮮寶物古蹟圖錄の第一として刊行
されたものである。收むる所の圖版七十六、各葉には

解説を附して閱覽に便し、更に故濱田耕作先生の總説を得て卷頭を飾つて居る。内容は大別之を二部に分つて前半十九圖を佛國寺に、後半五十七圖を石窟庵に當て、圖版第一より第三にわたつては佛國寺附近の地形圖並びに景觀、寺地の實測圖を收めて同寺をめぐる自然を理解するに便せしめ、第四圖には伽藍配置圖、第五より第十九圖までを諸建造物の圖版にあて、大石壇、大雄殿、石燈、多寶塔、釋迦塔、八方金剛座、銅造毗盧遮那佛、同阿彌陀佛、舍利石塔、幢竿支柱、石獅、石浮屠等を收めて居る。而して後半石窟庵の部にては圖版第二十、二十一には境内の實測圖と全景寫眞を、二十二、二十三には修復前の舊景と修復工事過程、二十四より六までを構造實測圖に、二十七以下を窟内諸像等に當て、前室八部神衆、金剛力士、四天王より始めて本尊、本尊をめぐる諸像を收めた周壁に及び更にその肉彫各像の部分の大寫し、次に上部の龜、龜内の各像、天井等、その編輯方針は部分を示すと共にそれら各部分の占むる位置、相互の關係を明かにする事に努め解説又佛の靜淨と平和と神嚴をあらはして些の冗漫も油斷もない名匠の神技のみならず、構造上本尊との間

に試みられたる特殊の工夫について特に強調して居る。蓋しこの佛寺並びに石窟庵に關しては、その著述や寫真集等の如きも決して少くはないが、從來諸書の收むる所が或は部分的斷片のであつたり、或は配置圖の如きも不確實であつた弊を除き、現存遺跡遺物の圖集に加ふるに精密な實測圖を以てして構造全般の紹介を企て、以て學的正確を期して居る點に我々は注意しなければならぬ。尤も本寺は荒廢既に甚しいものがあり、基本調査を行はずして急ぎ修復を施した爲、今日原形の既に明かならぬ部分も生じて居るとの事であるが、本圖錄にあつては特に寫真數葉をさいて修理以前の實狀を傳へ、殊に石窟庵修復の工事過程の寫眞を收めたのは、其實測圖と相俟つて構造を理解させる上にも甚だ有益な記録であつたと思ふ。

卷頭の總説は既に一言ふれた如く、悲しくも今は故濱田青陵先生の遺稿となつたものであつて、先生のあの坦々としてよどみなく、知らず／＼の内に人を引き入れて行く獨特の文章と、その平明な章句の内にもられた溢るゝばかりの詩情とは、僅か數葉の内、或は寺院の規模を述べ、或はその創建の歴史を説くかゝる總

説の内にも自らうかゞはれて——「吐含山の西籠翠黛滴る處、松林の參差たる間に薨を連ぬる」佛國寺に遊び「遙かに日本海の紺碧を望む斷崖の傍ら」、「山を穿ち窟を設けたる」石窟庵を訪ふ心は自ら讀者を誘ふものあると共に、この自然と人工の善美を盡した平和と神嚴の佛域を訪はれた美の人であり、直觀の人であつたことが偲ばれる。故先生を思ふ時、我々は感慨の新なるを禁じ得ないものがある。右の故濱田先生の總説について、資料の蒐集及び解説は藤田亮策氏が當られ、出版校正には梅原先生、寫眞は今關光夫、澤俊一兩氏、實測には米田美代治氏が従事せられたものである。

〔岡田芳三郎〕